

サン・スマイル 事業報告

I 主要事項

特別養護老人ホームサン・スマイルの利用状況（利用率）

・施設入所事業（定員 50 名）…93.8%（前年度 89.7%）

年間入所者数：16 名・退所者数：17 名

・短期入所事業（定員 10 名）…31.9%（前年度 26.7%）

施設内の衛生管理を徹底し感染症対策を継続しながら、福祉施設の機能を活かし地域に選ばれる施設を目指して進めていった。

施設入所に於いては、ここ数年利用定員に満たなかった利用者の方が4月から在籍50名でのスタートを切る事が出来た。近年は、90歳以上で入所されるケースも多く、施設生活が1年未満で終了されるご利用者も増加傾向にあったが、容態の急変や新たな病変の進行等に対しても手厚い支援を行ってきた。施設での生活が出来るだけ楽しく快適に過ごして頂ける様、保育園児との交流やボランティアの方にもお越し頂くなど職員一丸となり利用者個々の状態にあった支援を行った。

今年度は、6名の方の看取りを行い、ご家族にもサン・スマイルで最期を看取って頂いて良かったと言って頂き、職員の自信にも繋がった。

短期入所に於いては、沢山の新規利用者獲得が出来、その後も継続利用に繋げる事で少しずつではあるが利用率も上がった。地域の居宅介護支援事業所の方も見学等に来所され新規利用に繋がっている。

デイサービス サン・スマイル ケアプラン サン・スマイルの利用状況（利用率）

・通所介護事業（定員 23 名）…85.5%（前年度 87.1%）

・居宅介護支援事業…要介護者が月平均 71.4 件（前年度 77.8 件）

要支援及び事業対象者が月平均 24 件（前年度 14.7 件）

デイサービスに於いては、5月から利用定員を20名から23名の受け入れに変更し事業展開した。生活リハビリに密着した活動メニューや個別リハビリ・アミューズメント等にご利用者に喜んで頂き、その声が地域に広まり体験利用者を経て利用に繋がった。又様々な方にボランティアに来て頂き HP をご覧になった方々の問い合わせも増加し、待機待ちのご利用者も多くいらっしゃった。次年度もご利用者の思いに沿った活動等を提供し楽しんでご利用頂ける様努めていきたい。

ケアプランサン・スマイルは、移転後、近隣の利用希望者は要介護度が低い傾向にあり（要支援者が増加）実績としてはかなりの減となった。次年度は地域の実情を把握した上で、迅速な対応や当事業所の強みを生かした取り組みに努めていきたい。

今年度は、職員の働きやすい環境作りとして、「生産性向上委員会」を立ち上げ現場の問題点の改善や ICT 機器の活用の推進を行った。又、物価高騰の折、コスト削減を都度職員会議等で伝え職員に周知を図った。

2 評価・反省

【施設サービス】

1 生活支援及び介護

職員間での情報共有や多職種と連携を図りながら、個々に合わせた対応を行いご利用者の生活を支える事が出来た。また部屋担当や委員会などでプライバシー保護や拘束のないケアを実施し尊厳を守る取り組みを行った。

ご利用者の生活においては日々の様子を記録に残し、体調の事など必要時にはご家族へ報告・相談を行い、ご利用者・ご家族の意向に沿った対応が出来た。

ご利用者の楽しみとして季節感ある活動では、運動会や七夕会、クリスマス会や新年会、節分等。又、日々の活動では、書道や創作活動、園芸や調理といったレクリエーションを実施した。各行事や活動を行う中で、ご利用者の普段とは違う表情や発言、出来る力を知る機会となった。またハロウィンや運動会、敬老会では園児や外部ボランティア様にも来て頂き、賑やかな場を提供する事が出来た。

今後もしもご利用者の生活を支え楽しみのある日々が送られるようサービス計画に基づき、ご家族と情報共有を行いながら支援していく。

2 人材育成

職員同士、相手を思いやりコミュニケーションをとり情報共有を図る事で職員個々の成長に繋がった。今年度5名の職員が入職し、エルダー制による指導を行った。介護職未経験者や実務経験者等個々のキャリアに応じた指導を行った。日誌のやり取りや、口頭での助言を行う事や数ヶ月ごとの意見交換会で新職員、エルダー職員の想いを聞き不安解消に努めていった。

施設内研修（各委員会企画）・外部研修（集合研修・オンライン研修）に参加する事が出来た。内部研修は動画研修も取り入れながら多くの職員が参加できるよう工夫を行い、個々で「考える」「学びを深める」機会となった。

外部研修後に他職員に対し復命研修が計画的に実施する事が出来なかった為、来年度は他職員に向け研修復命を行い、利用者への質の高いサービス提供に繋げていきたい。

3 地域貢献

感染症（インフル・コロナ）予防が緩和されているが、1年を通じ近隣地域では感染を耳にする期間もあり積極的に地域との関わりを持つ機会は多くはなかった。職員のボランティア活動では神西湖の清掃活動に出かける事は出来た。

高校生の実習や社協主催の体験学習の受け入れを行い、ご利用者と一緒にレクで楽しんで頂たり、日常生活を見学して頂き福祉施設について見て頂く事ができた。又、麻雀・調理レクや各種行事に地域のボランティアの方を招き、交流を図る事が出来き、ご利用者の方々に楽しんで頂いた。

来年度はより一層地域との関わりを大切にし、地域との連携を図れるよう計画をしていく。又、実習生やボランティア等、外部の受け入れも積極的に行っていく。

4 医療・看護

日々のご利用者の健康状態を各専門職が情報共有することで、状態の変化を早期に発見し処置・

対応することができた。前年度の入院延べ日数 906 日に対し、今年度は 406 日であり嘱託医との情報共有・連携を行い、御利用者の突発的な状態変化の際も指示を仰ぎ早期に対応する事で、入院日数の減少に繋げる事ができた。しかし一方ではご利用者の超高齢化・重症化に伴い、誤嚥性肺炎・食事摂取困難・食事摂取量低下に関連した脱水や肺炎で入院されるケースがあった。

皮膚トラブルに於いては、介護職に協力を得ながら看護師が処置をすることで経過が追いやすく、観察の強化や早期受診の判断に繋げることができた。また、ご家族にも状態の変化を都度連絡し協力を得ながら対応した。

食事摂取量を見ながら毎月体重測定を行い、ご利用者の状況に応じ他職種が連携して食事量や食形態・補助食品の変更や追加などを検討し、栄養状態の改善や褥瘡予防に努めた。浮腫が強いご利用者には適宜体重測定の実施回数を増やし、嘱託医に相談することで内服調整や塩分制限などの指示を仰ぎ、呼吸苦などの身体的苦痛の軽減や皮膚トラブルの予防に努めた。

感染症においては、利用者間での新型コロナウイルスの発生や流行はなく、インフルエンザの感染者が出た際には職員間で相談・情報共有する事で混乱なく初動にあたり、協力しながら感染拡大を防ぐことができた。

看取りケアについては、6 名の方の「お看取り」をさせて頂いた。職員が看取りケアを経験する中で、マニュアルを適宜修正しながら活用し、動画研修で看取り期についての理解を深めることで看取りケアへの自信に繋げることが出来た。多くの職員が看取りケアの経験を重ねていくことで、穏やかな最期を迎えられるご利用者に対しての関わりができるようになってきている。看護師の知識や経験等も他職種に共有しながら、今後もその人らしい最期を迎えられるケアをしたい。

5 食生活

旬の食材を取り入れ月 1 回以上行事食を提供し、見て食べて季節感が味わえるような食事の提供を行った。調理レクを実施し、ご自分で調理することで食事への関心や楽しみを持ってもらえるような食の働きかけができた。来年度は頻度を増やしていきたい。献立においては、嗜好調査を行い委託会社との献立会議では、ご利用者の希望を反映できるような検討を行った。

また、ご利用者の食事摂取状況や嚥下状態に迅速に対応し、できるだけ経口摂取が継続でき、栄養状態の維持・改善ができるように多職種で栄養ケアプランに基づいた食支援を行った。

6 個別機能訓練

ご利用者の機能維持・改善に向けて生活状況に沿った訓練メニューを立案・実施することができた。また、環境調整（居室環境整備、ポジショニング、シーティング等）についても介護職員との関わりを密にとり、状態把握に努めることで早期に対応を行った。

福祉用具、福祉機器の適切な運用・普及についても引き続き力を入れ、利用者にあった福祉機器を選定、様々なデモ機を使用し購入検討を行った。今年度は走行用リフター 1 台を新規導入し、利用者・職員共に安心・安全な環境作りに取り組んだ。また、適切な運用に向けて介護職員への指導も継続して行った。

今後も利用者が快適な施設生活が送られるように、利用者の状態を十分に把握し、身体機能・動作能力維持改善に向けた支援を継続していく。

7 防災・防犯

自然災害 BCP を使った机上訓練を行い、BCP の必要性や目的等を職員間で共有することができた。災害を想定し、各職種、役職毎の役割分担を確認できた。また、災害に備えた備蓄の確認や非常食の調理・試食を行い、災害発生時にスムーズに事業を継続できるよう訓練することができた。防災メールを月に1回全職員に送信し、返信メールを送る訓練を継続して行っているが、現在も返信メールのみの訓練となっている。今後は実際に想定した防災メールの活用も検討していかなければと感じる。

日中・夜間想定避難訓練・通報訓練・消火器使用訓練を、西消防署・神西分団立会いの基実施した。避難経路、役割分担、初期消火の手順等の確認を行うことができた。

施設の利用者、職員の安心・安全を守るための防犯訓練として出雲西交番から講師をお招きし、さす又を使用した訓練や不審者への対応訓練を行った。サン・スマイルは出雲インターからすぐの場所にあり、誰でもいつでも侵入できる危険性もあり、次年度は実際に想定しての訓練も検討していきたい。

8 住環境

ご利用者一人一人が快適に生活できるよう居室内及び食堂やパブリックルーム等の共有スペース等、清掃の徹底や温度管理に努めた。各居室は利用者個々が使いやすいように、部屋担当がレイアウトを考え住環境を整えた。また、ご利用者が安心・安全に生活できるよう職員一人一人が感染症対策の意識を持ち、消毒や換気・各所の清掃を行い感染症対策を行った。

また、共有スペースには創作物等の飾り付けや展示を行い、ご利用者が季節を感じられるようにした。外部の方を気持ちよく迎えらるよう正面玄関の飾りつけや環境美化に努めた。

【居宅サービス】

1 ショートステイ サン・スマイル

居宅サービス計画書に基づいてサービスを提供できるよう、計画の変更時や介護保険更新時にはサービス担当者会議に参加し、ケアマネジャーや他事業所と情報共有を行い、計画に沿ったサービス提供が出来るように対応を行った。利用者・家族のニーズや思いに沿ったサービス提供を実施する為、日々の生活の様子を把握し、必要時、利用されている他のサービス事業所とも情報共有させて頂き、出来るだけ共通な支援展開が出来るよう努めた。

利用時にはレクリエーションや季節に合わせた施設行事・創作活動等に参加して頂けるよう促し、多くの活動に参加して頂くことが出来た。活動の他、利用者同士や施設入居者との交流も出来た。

健康管理については、利用前日の事前連絡の際に体調確認を行い、来所時にバイタルチェックを行った。また、入浴前にも検温や血圧測定を行い、都度体調の確認をしながら安全に入浴して頂けるように対応した。利用中は様子観察を行い、異常発見時には家族や担当ケアマネジャーに連絡し、状況報告や受診を勧める等の対応をした。機能訓練指導員を中心に昼食、夕食前のリハビリ体操は行い、参加していただく事が出来た。利用中は自宅での生活と同様に身体機能維持に繋がるように、歩行等の日常生活動作の中でリハビリが出来るよう意識して声掛けや介助を行った。

食事に関しては、利用者それぞれにあった食形態で提供し、食事時の様子や体調、身体機能の

変化がある際に都度見直しを行った。嗜好や食事量についても、利用中の様子を見ながら利用者本人に確認し、家族に家での食事の様子を聞きながら対応した。

個人情報・プライバシーの保護に関しては、十分に配慮し、利用者一人ひとりを尊重した対応を行うことができた。

リスクマネジメントとして、利用中に発生するリスクについて、家族やケアマネジャー、他事業所と情報共有を行い、個々に適した対応が行えるように努めた。センサーマットを使用している方へは、利用中の様子や本人・家族の意向を受け、適宜現場とも協議しながら検討、実施し事故防止に努めた。

2 デイサービス サン・スマイル

5月より定員23名に変更し、月平均の利用者数が20名前後と利用率も9割に近づいている状況となった。地域に根差した通所介護の役割を果たす事が出来る様になってきたと実感した。自然災害、感染症対策のBCP(事業継続計画)を作成し迅速に対応出来るように訓練を実施した。

日々の活動に於いては、天候に併せて屋外スペースのテラスで花植えやお茶会、外出やバイキング昼食など季節を感じて頂ける活動を取り入れた。また、ボランティア(麻雀、調理、三味線等)の方々の来所、保育園児との交流など地域との関わりの機会が増えた事で、ご利用者はもとより、ご家族にも話題提供出来、共に喜んで頂いた。

家族懇談会を開催し、施設内の見学やスライドショーを見て頂き、日頃の活動の様子を伝えたり、口腔ケアの重要性についてのプチ勉強会を開催し、ご利用者個々の口腔内の状態について情報共有を行うことが出来た。

個別機能訓練では、介護福祉士や看護師、理学療法士など他職種が連携して、ご本人やご家族の意向に合わせた計画を、かかりつけ医の意見を取り入れながら立案した。小集団または、1対1の個別訓練を実施し、身体機能・生活機能維持向上を図ることができた。

次年度も、利用者、職員が一体となり共に楽しみや役割を持って取り組める計画を立案し支援していきたい。

3 ケアプラン サン・スマイル

新規の介護保険サービスの受け入れをする中で、一人暮らしの高齢者や在宅生活が困難な状況にある高齢者、在宅での看取り対応等、受け付けをしてから直ぐに介入の必要のある介護保険申請中の利用者が多かった。その中でも介護保険の認定結果が、要支援になるケースが多く、介護支援専門員の受け持ち利用者件数に変化はあまりないが、本来対応する要介護認定の利用者のケースが少ない結果となった。

斐川町では、90歳を過ぎてから始めての介護保険申請の利用者が多かったが、移転後は、早いタイミングでの介護保険申請になる為、受け持ち利用者の平均年齢も若くなり、介護度も低くなる傾向である。

しかし、初回の認定結果が要介護5の重度の利用者からの依頼も数件あり、居宅介護支援事業所だけではなく、バックにデイサービス・ショートステイ・特別養護老人ホームがある強みを感じた。

初回訪問連絡が上手くいき、数日のところで訪問し、迅速な対応が出来たケースがある一方で、タイミングを逃してしまい、初回訪問に期間を要したケースもあり、いかに初動対応を迅速にす

るかが今後の課題である。

一人暮らしの高齢者世帯・高齢者夫婦世帯・同居家族に支援(見守り)が必要な世帯が増加傾向にあり、介護支援専門員として家庭内や近所等、大きな視野を持って介入するように努めた。

物価高騰の折、コスト削減(電気・備品等)や利用者宅訪問の効率(車のガソリン・業務の時間等)を意識しながら業務を行った。しかし、迅速な業務遂行に努めていたが、業務のメリハリや区切りが上手くいかず、一つの業務に時間を使い過ぎる等時間や仕事の配分が出来ない事があった。